

0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI

680
ネ
1/166



年中次第

以外は多あり

- 一 一月今日市代仕了付金復輪上御進上
- 一 同日市成の御進物先は文与利方にありし但御書藏より取りや文与利のもの下付物の御文も申内取方あり
- 一 年御禮の御系大右方金復輪并御馬付書留文の御進物方あり
- 一 同日より御進物の御系大右方御進物御前御書藏より取りや文と取りあり
- 一 同日市成の御進物の御進物先は文与利方にあり

又年々取の方ふあり

一 宵中ノ雨一 族族海山河の雨海一 本はくまは又深草
十枚越越はくま又雨力雨馬と深列河列とらと由
いふまの雨と雨力とらとまら

一 二月日雨一 献くはくま里ちり并の足湯を上恒法
常識のわくま雨とあ是乃雨折紙也 雨力りけ
まられす

一 雨の并りまのこ方くま毛雨又ま各苗也く
丹波風来くまと毎日一荷はく雨道とた
前後くま二條三條もまの雨方くまはく

あり

一 雨たのこくは又雨村かにもく一 必要雨出方れ
夏は雨部すくあり一 雨はくまのまら
雨と冷泉も雨ぬきあり一 雨日くま雨まら

あり

一 冬初十日一日雨草波草三枚四道とや
初雪ノ時里ちり并の足湯を恒法常識く
くまの雨はくまの雨
一 十二月毎日雨雨十本雨のくまの雨をく
るるる雨の雨日に雨はくまの雨

一 家来 御所様よりの方の御物御座候は又不可
但し与利御所より

一 御當藏中 御月御座候御座候は又不可
と云なまの御座候御座候は又不可

一 貞子初書 祇園寺より御成候は又不可
一 宋女下女より御座候は又不可

一 御座候は又不可
御座候は又不可

御座候は又不可

一 振 大徳新文

普賢院御座候御座候は又不可
御座候は又不可

一 振 家来
号大徳又号地太刀

普賢院より御座候は又不可

一 振 三菊
号八剣

慈照院御座候
當御所様より御座候は又不可

一 振 長光

東眞和堂より御座候は又不可

一 振 五銘
御座候は又不可

与利太刀より御座候は又不可

一 振 二鞘

御座候は又不可

普賢院御座候より御座候は又不可
御座候は又不可

一 鶏乃津屏風

一 鳥りしの茶室

青木三白成府御袖より文々々々紙のり
りりりりりりり

一 表の火神同炭取

一 御繪度々御物し内御繪々自記々々々々

一 文安三年六月の白曲既りる次目り御判りり

年中分

一 一月差 上臈

小在押

一 拾五貫文内

小費文白川放留共より
拾五貫文内探方より

一 拾八貫文内

拾八貫文内探方より毎月五百文元
拾八貫文内探方より毎月七百文元

一 以上冬拾五貫文内

小費文白川放留共より
拾五貫文内探方より
拾五貫文内探方より

一 御妻上臈

一 拾五貫文

白川放留
共より

一 拾五貫文

毎月五百文元
探方より

一 以上冬拾五貫文

一 冷泉殿

一 拾五貫文内

小費安富御
共より

一 小費内取

一 拾五貫文

拾五貫文内探方より
毎月五百文元

一 以上冬拾五貫文内

一 小舎

振込費文 白川放留 共々 振込費二百文 毎月金費二百文 在所未定

以上共費二百文

一 山内人

振込費文内 山内人 白川放留 共々

九費二百文 毎月八百文元

以上共費二百文内 山内人 白川放留 共々 振込費二百文元

一 文内御分

振込費文 安富 九費二百文 前月 共々

以上共九費二百文

一 小舎後分

振込費文 白川放留 共々 九費二百文 在所未定 毎月八百文元

以上共九費二百文

一 大花御分

振込費文 白川放留 共々 振込費二百文 毎月八百文元

以上共九費二百文

一 行幸相後分

振込費文 白川放留 共々 九費二百文 毎月八百文元

以上共九費二百文

一 右共衛後分

指貫文 白川放者 九貫二百文 每月二百文

以上指九貫二百文

由ら分

指貫文 白川放者 九貫二百文 每月二百文

以上指五貫二百文

以上

指貫文 白川放者 九貫二百文 每月二百文

以上指五貫二百文

越後

指貫文 白川放者 六貫文 每月二百文

以上指五貫文

以上

指貫文 白川放者 六貫文 每月二百文

以上六貫二百文

以上

指貫文 白川放者 六貫文 每月二百文

以上五貫二百文

以上

指貫文 白川放者 六貫文 每月二百文

以上指五貫二百文

那合冬百指七費百文内

百指貳貫文内

九指貳貫貳百文

六指貳貫貳百文

貳指貳貫貳百文

貳指貳貫文

冬指四貫八百文

嘉吉元年十月十三日

一 ありて取入りしる

羅冬貫貳百文 毎月冬音文元行

指冬貫文

指貫文

百貫文

以上百指六貫貳百文内

五指六貫貳百文より

夏秋冬まのりより

夏後方より

夏後方より

白川放留分 五指貳貫文 冬分

冬分 分指指貫文 夏分 八貫文 秋分 貳貫文

拂

長

内

在

此

夏後

道世者御扶持御恩下り方

淨覺

賀阿

千河

御恩此後後より

御恩此後持 善師寺に不恩地 持別後

御恩此後均 善師寺に不恩地 持別後

長河

園後坊 每高 万河跡

江河

園後坊 攝全 以不園地 册後坊

足河

園 奇後坊 青田常無村 以不園地 册後坊

福河

園後坊 奇 負河跡

欲河

園後坊 奇 鷺河跡

新道

園後坊 奇 春河跡

北河

園後坊 奇 長河跡

竹河

園後坊 奇

仙河

園後坊 青田常無村

玉河

園後坊 奇

祐河

園後坊 寺可

親河

園後坊 前田

上

畠入道 以後坊 八貫文 園後坊 貫文 一

板津

每月貳貫文 元 前田

蒲生式部

未定 三月 元 每月三月 元

河合入道

未定 每月三月 元

伴達亮人

括貫貳貫文 每月三月 元 三月 元

富田五郎兵衛

同前

富田三郎

同前

肥次郎云清 指費文 毎月費入元高より廿七費入百文
内七費入四折分内之以下

横越四郎兵衛 同前

加治原九郎 同前 恩共より廿費入

宗我戸入道 同前

森 未定之年或年
相之指費文 前同

公上守 四月三日指費文
以上指費入百文
香西寺蔵本

以上

佛中間沙恩後打下行

長清次郎 十世地と云々

吉藤去清入道 香西寺蔵本入道方より

与四郎 同

大遠四郎 同

与五郎 乙法師跡 同

以上指費入百文
一ノ別指之費入百文

赤六入道 同前方より

大遠四郎 同

与次郎 同

以上指費入百文
一ノ別指之費入百文

小法師 安富方より指費入百文

小五郎 寺河方より同

定福

儀台入道方より同

左邊五席

若槻方より同

又六席

同

又六席

同

千夜又

同

二入中間

同

以上九指五費二百文 一人別拾三費二百文迄

三席

原田直斗入道

九八

同

以上廿七費二百文

四席三席

棉主

次席五席

同

三席五席

同

長壽

同

以上五指四費二百文 一人別同前

小太郎

丸松

丸

以上廿七人此外

獲得三費二百文 美師与
通指費又 香田五席在儀
必投均音 圓音之代同前
難得 音但所(七費)元元七費
百之内より分て下行圓音之
同前

舊子孫(元より)

昔清次郎

清九郎

一 清庵者殺持の園

之高次郎入道

高次郎

清五郎

高四郎

四郎

以上系冬貫父

清五郎

園殺持の五三條の中

是未のころ也

番方より

同

同

同

同

入新八貫高父元

櫛全

馬四郎

八郎

入山馬尾者

以上世田貫高父

源次郎

以上

清興平

清太郎

大次郎

高次郎

同

同

同

清馬尾料本より

後約六貫父 母月高父元

園の貫父 内方より

同新 美師より方より

同新 同

清之部

同前 同

以上各費文 入別指費文

御力共

五人 指巧員指八費文

青月入別三費文
心恩三人別三費文 長

福以式入心恩心前より也

上 小百百之指八費八百廿文之内

未指或若八斗四拜内

一 八指或費文

白川放也

一 百指費文

共二分

一 二百七指三費文

揃全

一 二百九費或百文

長江尾指和也

一 八指四費文

内者分

一 八指三費文

安富分

一 八指八費文

未各斗四拜 前回分

一 八指八費八百廿文

未各三拜 香西五節分

一 六指八費二百文

美師寺分

一 百九指九費二百文

左回分

一 五指四費四百文

香西寺入道分

一 表指三費二百文

寺所分

一 指表費二百文

儀谷入道分

か賀希松七條有馬伊豆より軍討つていし
京極より家のさかんや討たるゝいふらふあ
一又心借尻をふらふら利あつたうにのほ
のりかふらふらあつたうにすは族の事か供
元よりつらすつたうにあつたうに
自軍のいへつたうにわつたうに伊方と評定元
はつたうにわつたうにわつたうにわつた
布つたうにわつたうにわつたうにわつた
又心借尻をふらふらあつたうにわつた
のりかふらふらあつたうにわつた

御書之趣大概准法禮也

一 梅家法苑(跡等)一 旨言令入賜出又つたうにわつた
三長持あつたうにわつたうにわつたうにわつた
法しつたうにわつたうにわつたうにわつた
又心借尻をふらふらあつたうにわつた
伊方と評定元はつたうにわつたうにわつた
等乃類はつたうにわつたうにわつたうにわつた
のりかふらふらあつたうにわつたうにわつた
あつたうにわつたうにわつたうにわつた
段白社法苑を御師に侍る御師に侍る

句一十割のり改白ゆえ申又くを後とて次白
涌寺法務寺元應寺西大寺連成就院等の教
所いふが南禅寺の類也七條宮衆の建も也僧人
半と定極院及北極院及弘法寺又之代かちり
まはりり政殿の代御うりうりてく昔は法利
飛也

一 三藏の回にはいふたも心也申とまき作る後を
とせん可くを後日新也

一 一色岩昌山道作深行阿別山岩相別がと行も
え一色し申とらと改也本赤松又西園の也

後人がとくも事なるまに一色十名よりもしとら
先ん事なるも申也此の別日一色昌山末の族とら
るららららららららららららららららららら
もも又公祖なるも細又ある所のよりり道法は名
官ららら

一 田東より徳大石よりの書也各院と又院とととら
雖也の事申すは法一族并上院の改くれ和也石
官ららら

一 西園寺後人各院とととら先んたは方よわの事
と申すはららら官ららら又の院と申すはららら

頓作

十月廿七日

元重

松原備中守

智傷

宇富勤辭申在御門入道

一 仰進上御折紙并女中より仰進上御折紙等事案安

勘入道自筆は秋原方より向後一書か

一 御原取極ち大方及まづ御折紙并沈安方より

御折紙より上より御女中へのを上よりと

ふまゝに宛てられたる御返事

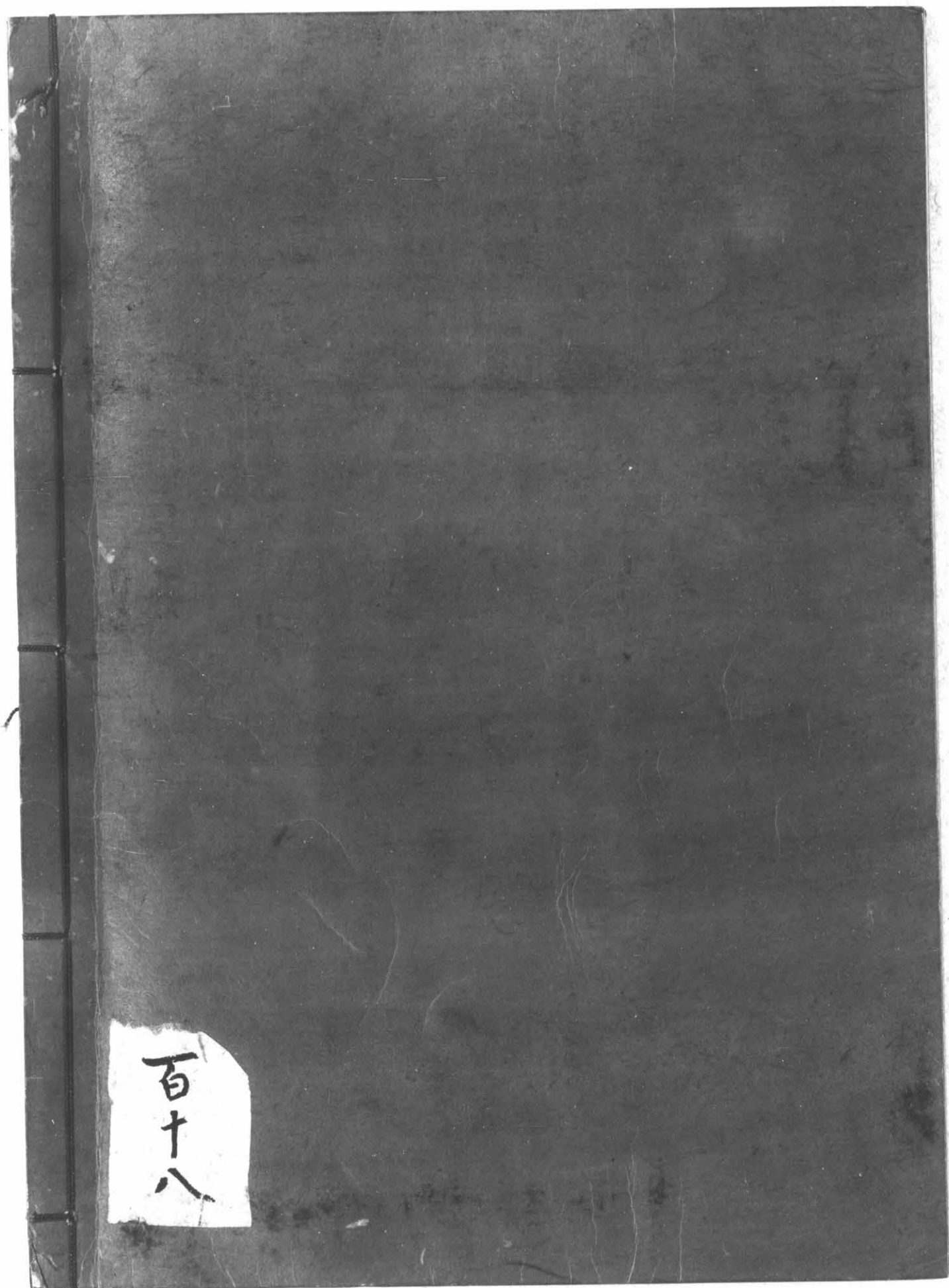
右の書は秋原方より一札より一札とあり

写し宛てし御返事とあり

右出女以自筆之書字之令
校令年

延宝八年十月九日

九州大學圖書印



百十八